

お お ち ょう  
大 軽 町

柿本人麻呂も詠んだ街

大軽町の一帯は古代、単に軽（かる）と呼ばれていました。

万葉歌人の柿本人麻呂が「軽の路は吾妹子（わぎもこ）が里にしあれば」と、愛した亡き妻を懐かしんで詠んでいます。また、たくさん残る古い文献にも軽の邑（むら）、軽の市（いち）、軽の街（ちまた）などと、この地を表す数々の呼び名がたびたび出てきます。

時代が特定できる日本書紀の記録では、欽明天皇妃だった堅塩媛（きたしひめ）の遺骨改葬にあたって、推古二〇（六一二）年「見瀬に接する軽」に、死者を悼み祭る殯宮（もがりのみや）を設けたとあり、天武天皇朱鳥元（六八六）年には、この地の軽寺へ「田畑を寄進」した旨の記録や、応神天皇が軽の「豊明（とよあき）の宮」で政治を行い、ここで亡くなったことなどの記録があります。

この「軽の街」が四世紀末から五世紀初頭に姿を見せたあと、一時とはいえ政治・経済の中心地となっていたことは、まず間違いないと考えられています。